恩返しがしたい

国立大学法人筑波大学　附属駒場高等学校　２年
武藤　真

「僕は将来自分が稼げるようになったら、自分の国に恩返しがしたいな。」

ちょうど一年前メキシコ人の友達から嬉しそうな顔とともに放たれたその言葉は、今でも僕の胸の奥に残り続けています。去年の夏休みに、僕はカナダに短期留学をしていました。それは人生最高の三週間だったのですが、その終わりくらいに「将来お金を稼げるようになったときに、それをどのように使うか」というテーマを話し合いました。どんなわけか、僕は日本人の友達らと

「税金って高いよねー。どんなに稼いだって半分しか残らないんだから。」

と話していました。そんな中、冒頭の言葉が投げかけられました。そして彼は続けました。

「税金だけじゃなくてもっと還元したい。だってそれが未来の子供のためになるんだもの。」

その時は僕とはかけ離れた価値観に触れて驚き以外のなにものでもなかったのですが、時間が経って考えている今、はるかに納得させられるものがあります。別に「増税しろ！国にもっと金を落とせ！」と主張するわけではありません。ただ、税金というものを改めて考えたいということです。税金というのは、この日本という国を形づくり動かしていくものです。税制度のない世界を考えてみてください。僕らが歩くどの道も地面が剥き出しで異臭が漂ってきて、夜中となると光はおろか警察もなく治安が悪くて外に出ることすら出来ない。それにも関わらず医療費は高額で病院にもいけず、年をとって退職したあとの未来も真っ暗です。また、今まさに僕らが通っている学校すらも存在せず、子供を育てるにも十分な教育は担保されていません。日常にある当たり前のことが全て税制度によって支えられているということに気付くことができるはずです。僕もそうでした。すると途端に、今まであまり良く思っていなかった消費税や将来払っていくであろう税金たちの印象が、180 度変わりました。そうです。私たち一人一人が税金という形を通してこの国の経営に関わっているのです。また、優しい目をしていた彼が言っていたとおり税金を払うということは、今まで支えて守ってくれたことに対する自分の国への恩返しでもあるのです。そして、それは未来の子供たちに繋がっていって、その次の世代へと繋がっていきます。恩返しの連鎖とも言えるのです。僕たちは今そんな恩返しの連鎖の中にいます。そして、それを途切れさせるわけには決していかないのです。高齢化社会や膨み上がっていく社会保障費、それに伴う若者世代の負担や国債の増加など様々な問題がいまだ山積みですが、感謝の心を忘れずに「恩返し」をしてその「恩返しの連鎖」を将来に繋げていきたいと思います。